

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月21日現在

機関番号：11302
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22530846
 研究課題名（和文） 社会教育の理論および実践におけるインフォーマル教育の位置に関する研究
 研究課題名（英文） A Study on the Position of Informal Education in the Theory and Practice of Social Education in Japan
 研究代表者
 梨本 雄太郎 (NASHIMOTO YUTARO)
 宮城教育大学・教育学研究科高度教職実践専攻・教授
 研究者番号：80292803

研究成果の概要（和文）：社会生活におけるさまざまな場面において、働く・遊ぶなど教育以外を主な目的とする活動の中にも学習は起こりうる。本研究では、そうした学習を支援するしくみや取り組みをインフォーマル教育と名づけ、社会教育のあり方を活性化する手がかりとして考察をおこなった。

研究成果の概要（英文）：Learning can occur in various settings, such as working, playing, etc., which have other purpose than education. System and practice for the facilitation of such learning should be called informal education. This study has investigated informal education which can be expected to be an activator for the social education in Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育学

キーワード：社会教育、informal 教育、成人学習

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究の主題であるインフォーマル教育 informal education については、社会教育および国外の成人教育の研究において、その位置づけが十分に確定しているとはいえない。

関連する概念であるノンフォーマル教育 nonformal education やインフォーマル学習 informal learning との関係を含め、概念規定を改めて規定し直すことが必要である。

(2)これまで社会教育は、フォーマル教育

formal education としての学校教育との対比が強調される中でノンフォーマル教育 nonformal education としてその基盤が確立されてきたといえる。しかし、社会教育実践をとりまく環境が変容する中で、教育が形式的・表層的にとらえられる傾向があり、職員の役割も定型的なものとなりがちである。このような状況の中で、改めて社会教育の存在意義を確認するためには、制度化になじまないインフォーマル教育 informal education がもつ意義に注目し、その関連をつうじて改めて社会教育のあり方を考えることが有効であると考えられる。

(3)学習活動の周縁部もしくは境界領域に属するインフォーマル教育の適切な位置づけをおこなうことは、教育研究とそれに関連する社会・人文科学の研究とを接続する理論的枠組みの構築につながるとともに、学習活動が社会に及ぼす影響をとらえるという実践的・政策的な面での効果も期待できる。

2. 研究の目的

(1)インフォーマル教育の概念規定に関する議論の整理

先行研究の中には、インフォーマル教育とノンフォーマル教育の違いや関係が明確ではないもの、informal と education との結びつきを避けてインフォーマル学習 informal learning のみを用いるものなどが存在するが、これらの比較検討をつうじて論点を明確に整理した。

(2)社会教育におけるインフォーマル教育の意味についての理論的・実践的考察

発表した論文では、「遊び」や「居場所」

のもつ教育的な意味について考察をおこなった。

3. 研究の方法

(1)社会教育および国外の成人教育における文献の検討を通じて、インフォーマル教育の概念規定を明確化するとともに、インフォーマル教育の意義について考察した。

(2)教育以外の社会・人文科学の文献の検討を通じて、インフォーマル教育をとらえるための枠組みを抽出し、整理した。

4. 研究成果

(1)インフォーマル教育とは何か、インフォーマルな学び・学習やノンフォーマル教育との関連等を含めて整理した。

①議論の出発点は、学校教育制度や社会教育のさまざまな事業・活動とはかならずしも関係なく、社会生活のさまざまな場面や多種多様な社会的・文化的活動の中に埋め込まれているインフォーマルな学びである。これらの多くは学習を主な目的としておらず、また、学習を含んでいると自覚されていない場合も多い。

このようなインフォーマルな学びを新たに生み出し、あるいは活気づけようという営みがインフォーマル教育である。そのような営みは教育という制度上の裏付けをもたず、また、そこに関わる当事者自身が教育を自覚していない場合も多い。しかし、制度や当事者の意図とは無関係に、学習を促すという機能をもつかどうかによって、このような営み

を一種の教育であると見なすことができる。

②informal educationを主題とする古典的な文献として、Josephine Macalister Brewの著作 *Informal Education: Adventures and Reflections* (Faber and Faber, 1946) と Malcolm S. Knowlesの著作 *Informal Adult Education: Guide for Administrators, Leaders, and Teachers* (Association Press, 1950) を検討した。

両者に共通するのは、インフォーマル教育の特徴を学習者の課題や興味関心に応じた柔軟性とする視点、また、インフォーマル教育だけを独立してとらえるのではなく、ノンフォーマルなど多様な教育方法・形態を自由自在に使い分けることを重視する姿勢である。

③フォーマルな教育ではなくという消極的・除外的な理解にとどまらず、より積極的にインフォーマル教育が何でくあるのかを問おうとする研究として、Philip H. Coombsの示したフォーマル／ノンフォーマル／インフォーマルの3類型を検討した。

クームズが述べる「日常の経験と環境との接触から知識・スキル・態度・洞察を獲得していく、生涯にわたるプロセス」としてのインフォーマル教育は、生涯にわたる学習の総体の中で圧倒的に大きな割合を占めるものである。クームズは、フォーマル教育とノンフォーマル教育がインフォーマル教育を補足するものであると3者を位置づけ、ノンフォーマル教育のあり方を考える際の参照項としてインフォーマル教育を重視した。

今後の社会教育および学校教育のあり方を考える上でも示唆深い視点であるといえる。

④Coombsの3類型を踏まえて展開されたその後の研究を検討してみると、大きく2つの流れに整理することができる。

1つは、N. J. Colletta、鈴木敏正、David R. Evansらに見られるように、教育的な意図や計画性の強弱によってフォーマル／ノンフォーマル／インフォーマルを区別しようという研究である。このような立場をとることは、フォーマル教育を基準とする教育観をとることを意味するものであり、そのような中で、インフォーマル教育はそれ以外のもの・そうではないものという副次的・消極的な位置づけにとどまることになる。

これに対し、もう1つの立場は、Alan Rogersが提起しているように「文脈化 contextualisation」の強弱によってフォーマル／ノンフォーマル／インフォーマルを区別しようというものである。ここではフォーマル教育は、学習者一人ひとりが抱えている課題や興味関心、学習がおこなわれる場面における人間関係や組織のあり方などから切り離され、自立した形で成立しているととらえることができる。これに対し、それらすべてと緊密に結びつき、けっして切り離すことができない形で成立するのがインフォーマル教育ということになる。

このようにとらえることによって、フォーマル教育やノンフォーマル教育とは異なる独自の存在意義をもつものとしてインフォーマル教育を理解することができる。このような「つながり」に強調する視点は、インフォーマル教育がさまざまな「波及効果 ripple effect」をもたらすと述べる Tony Jeffsらの議論にも共通する。学習成果を活用した社会的課題の解決が強調される近年の状況において、このような視点からインフォーマル教育の意義を考えることが重要である。

(2) インフォーマル教育のあり方を問うことは、教育以外の活動の中に含まれている学びと、それを促すしくみに着目することを意味する。教育以外のさまざまな領域における理論や実践を手がかりに、インフォーマル教育の可能性について考察をおこなった。

①遊びを通じて子どもの人間形成をめざす取り組みや、子ども・若者の「居場所」づくりなどの活動は、かならずしも教育や学習を前面に出して展開されているわけではない。むしろ、教育や学習の名のもとに特定の意図の実現や活動の管理ないしは制約が加わるのを避けることによって、新たな活動の創出、参加者層の拡大、活動に参加する当事者間の関係の変容などを志向しているものと考えられる。

このように、インフォーマルな学びとそれを促すインフォーマル教育のあり方に注目することは、教育と学習のあいだに短絡的な因果関係を見る視点から脱却し、多次元で重層的な関係の中で教育と学習をとらえることを意味する。教育や学習の可能性をより豊かなものにするためにも、インフォーマル教育に注目することの意義が確認できたといえる。

②そのほか本研究では、ビジネスの活動とそれを支える企業等の組織、市民活動とその主体であるNPO等の組織などに特に焦点を当て、それらに含まれるインフォーマルな学びをとらえる枠組みの構築に向けて議論を整理してきた。

活動そのものの中にどのような学びが含まれ、また個人の学びを促すどのようなしくみが設けられているのか。活動を支える組織と個人がどのような関係にあり、組織の維持や変容にどのような学びが関わっているの

か。個人の学びと組織の学びとがどのように関連しているのか。これらの点については、さらに研究を進める必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①梨本雄太郎「インフォーマル教育論序説」『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』(査読有), 第5号, 2012, pp.143-154.

[図書] (計1件)

①梨本雄太郎「遊び・居場所・人間形成」鈴木真理・永井健夫・梨本雄太郎編『生涯学習の基礎 [新版]』学文社, 2011, pp.152-161.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梨本 雄太郎 (NASHIMOTO YUTARO)
宮城教育大学・教育学研究科高度教職実践専攻・教授
研究者番号: 80292803

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: